

先日、昨年3月にご紹介した『べんけいとおとみさん』の作者、石井桃子氏の「かつら文庫50周年記念の集い」に参加して参りました。かつら文庫の出身である阿川尚之氏（尚之氏はかつら文庫の第一号だそうです！ご紹介する本の中に出てくるN.Aちゃんとは尚之氏のことだそうです！）、佐和子氏兄弟などが文庫の思い出を語られた後、一昨年7月にご紹介した『えほんのせかいこどものせかい』の著者、松岡享子氏の講演がありました。かつら文庫の50年の活動を通して、子どもに本を手渡すことの大切さと難しさを再認識し、また、子どもと本との出会いの素晴らしさに胸打たれたひと時でした。私のつたない言葉では言い表せない感動を石井氏の著書を紹介することで皆さんにお伝えしたいと思います。ぜひご一読ください。

『子どもの図書館』

石井 桃子 著 岩波新書 一般 1979年

<お勧め年齢>

幼稚園☆☆☆ 小低学年☆☆☆ 小中学年☆☆☆ 小高学年☆☆☆ 中学生☆☆☆
高校☆☆☆ 一般★★★

（★が多い年齢の子どもにお勧めです。）

<本の紹介>

この本は1958年に石井桃子氏が「かつら文庫」を始めてから7年間の記録をまとめたものです。編集者として岩波少年文庫の編纂に関わり、ご自身も児童文学を書かれ、イギリスやアメリカの公共図書館をまわった経験を持つ石井氏が、自宅の一角にかつら文庫を始めたきっかけは『子どもと本を一つところにおいて、そこにおこるじっさいの結果を見てみたい』という動機からでした。文庫という活動を通して、石井氏は子どもを知り、子どもが求める本を知ろうとなさったのだと思います。この本には石井氏がどのようにして文庫を開き、どんな苦労をしながら文庫を「本を読む場所」として定着させたか、その中で子どもたちはどのようにして本と出会い、その本が子どもの中に根付いていったかが詳しく書かれています。ひとりひとりの子どもたちの読書記録も掲載され大変興味深いです。後半は「子どもの本」と「子どもの図書館」についての石井氏の経験や考えが記されています。この本に感銘を受けた方々によって日本に家庭文庫がたくさん誕生したというのは有名な話ですが、石井氏はこの本を文庫活動普及のためでなく、公共図書館、それも子ども図書館の大切さを訴えるために執筆されたそうです。前半部分にも文章の端々に氏が公共図書館に寄せている期待と、差し迫った状況が垣間見られます。そして、その状況は50年経った現在でもあまり変わらないという事実が図書館司書として頑張らなければならないと襟を正す思いです。一人の力が微々たるものでも、信念を持ち、やり続ける事で想いは成し遂げられるということもこの本のメッセージのひとつだと思います。考えてみたら、石井氏は50歳でかつら文庫をお始めになったとのこと。「あせらずに一歩一歩」という事も今回感じた事のひとつでした。



このコーナーで紹介した本はお近くの図書館や書店にあります。ぜひ手に取ってみてください。

早良図書館 吉岡 さやか